

現場からの便り

わが国の老年心理学の最近の歩みから

守屋国光*
Kunimitsu MORIYA

Birren, J. E. (1961) は、老年心理学に関する研究の最初を Quetelet, A. (1835) に求め、それ以降を 3 つの時期に分けて、老年心理学に関する研究の歴史を概観している。すなわち、1835~1918 年を初期、1918~1940 年を体系的研究の開始期、そして、第 2 次世界大戦に伴う研究の中斷後の 1946~1960 年を発展期としている。

1835~1918 年（初期）は、Quetelet, A., Galton, F., Pavlov, I. P. といった 19 世紀の偉人達によって、老年心理学研究が、正当なものとされ、望ましいものとされ、可能なものとされた時期である。

1918~1940 年（体系的研究の開始期）は、Hall, G. S., Miles, W. R., Bühler, Ch. らによって、老年心理学が量的・質的な両面での発展を示した時期である。

1946~1960 年（発展期）は、戦争による研究の中斷後の時期であるが、老年心理学研究のための諸研究施設、諸学会が発足し、活動を開始し、国際学会も開かれるようになり、老年心理学が世の注目をあびるようになった膨張期であり、名実ともにその研究領域を確立した時期である。

1960 年以降は、発展期の継続として多くの研究がなされていく一方で、それまでの研究の見直しがなされ、研究の在り方が問われている言わば再編成の時期である。

わが国における老年心理学研究は 1920 年代後半に既に始められているが、本格的に組織立った形で行われ始めたのは、東京都により待望の総合研究所（東京都老人総合研究所、太田邦夫所長、11 学部 31 研究室）が創立された 1972 年以降と考えてよいであろう。それ以前の歩みについては、わが国の老年心理学研究の先駆者である橋覚勝の『老年学』（1971）などに詳しい。それによれば、本邦では 1956 年に第 1 回日本ゼロントロジー学会総会が東京で開かれ、これが第 3 回まで開催された後、その後を受けて第 1 回日本老年学会総会が 1959 年に東京で開か

れ現在に至っている。日本老年学会は、日本老年医学会と日本老年社会科学院とから構成され、前者の機関誌として「日本老年医学雑誌」が 1964 年より刊行されている。日本老年社会科学院はかなりルーズな学会であったが、後述する第 11 回国際老年学会議が東京で開催されるに先立って、1977 年に事務局が東京都老人総合研究所社会福祉研究室内に移されてからは、比較的に学会らしくなり、1979 年からは機関誌の刊行も予定されている。これに先立ち、東京都老人総合研究所社会学部より「社会老年学」が 1975 年 3 月に創刊されている。

東京都老人総合研究所が創立された 1972 年以降のわが国の老年心理学研究の動向についてごく簡単に触れてみるならば、次の通りである。

1972 年には、わが国で最初の老年学ハンドブックであるとも言える『講座日本の老人』（全 3 卷）が刊行されている。老年心理学に相当する部分は『老人の精神医学と心理学』（金子仁郎・新福尚武編、1972）の巻に含まれている。

1975 年 3 月には、本邦で最初の、そして唯一の専門学術雑誌である「老年心理学研究」（老年心理学研究刊行会）が創刊されている。この専門学術雑誌の出現によって、わが国における老年心理学への関心が一段と高められ、遅まきながら、老年心理学の本格的な体系化の試みが、わが国の心理学研究者の間でも、この雑誌を中心として開始されるに至った。同年に開催された日本心理学会第 39 回大会では、初めて老年心理学関係の発表だけで発表会場の 1 室を占められるようになった。

その後、研究成果の増加と老年研究への一般の人々の強い関心を反映して、『老人心理へのアプローチ』（長谷川和夫・賀集竹子編、1975）、『ハンドブック老年学』（長谷川和夫・那須宗一編、1975）、『神経と精神の老化』（太田邦夫・村上元孝監修、1976）、『老年心理学』（長谷川和夫・霜山徳爾編、1977）、『老化のプロセスと精神障

* 東京都老人総合研究所
Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology
(現所属: 大阪教育大学)

害：老年心理学をめざして』（戸川行男・保崎秀夫・守屋国光編，1979）などが相次いで出版されている。

1978年8月20日～25日にわたって第11回国際老年学会議が東京で開催された。世界48カ国から2,230名（うち日本から896名）が参加し、総会9（2セッション）、シンポジア264（56セッション）、一般演題670（89セッション）という盛大なものであった。この国際学会の開催によりわが国の老年研究の水準は急速に高められ、また、世間一般の老年問題への関心も一層高められた。わが国の数少ない老年心理学研究者もこの国際学会に多くの期待を寄せて参加したことは言うまでもない。前述した「老年心理学研究」は第4巻1号2号（1978年）を国際学会での発表論文を中心とした英文特集号とした。また、国際学会を目前にして高年心理学研究連絡会（兼子宙会長）も組織され、国際学会に関するニュースを流すなどの啓蒙的活動を展開した。東京都老人総合研究所は、隣接する東京都養育院附属病院と共に、国際学会の実質上の主催者として機能した。

以上の簡単な記述からも、1972年以降のわが国の老年学、老年心理学の発展に東京都老人総合研究所の存在が大きく寄与してきたことが知られよう。

ところで、皮肉なことに、老化現象の解明を目指して設立された研究所も、国際学会の実質的主催者という大役を設立間もない段階で果たし終えた現在、自らの老化現象を深刻に心配し始めている。それは、研究所以外に

老年研究者の活躍の場がほとんどないために、スタッフの新陳代謝が思うように進められないことが主たる原因となっている。すなわち、研究の発展の一方でマンネリ化が避けられないことが頭痛の種となっている。こうした現実は、わが国の老年問題への関心の水準がまだまだ低いものであることを如実に反映している。

研究所の全体の概要については資料として後述してある。ここでは、最後にそのうちの心理・精神医学部の構成について簡単に紹介しておきたい。心理・精神医学部は研究所設立時に心理学部であったものが、1977年に改称されたものである。

＜心理・精神医学部の構成＞

1979年3月31日現在、（ ）内は専攻分野を意味する。

○心理・精神医学部

部長 1名（精神医学）

○心理研究室

室長 1（心理学）

研究員 2（ ” ）

研究助手 3（ ” ）

○精神医学研究室

室長 1（部長が兼務）

研究員 2（精神医学、1名は非常勤）

研究助手 2（心理学）

作業員 1（脳波）

上記以外に兼務研究員 1（精神医学）

参考資料

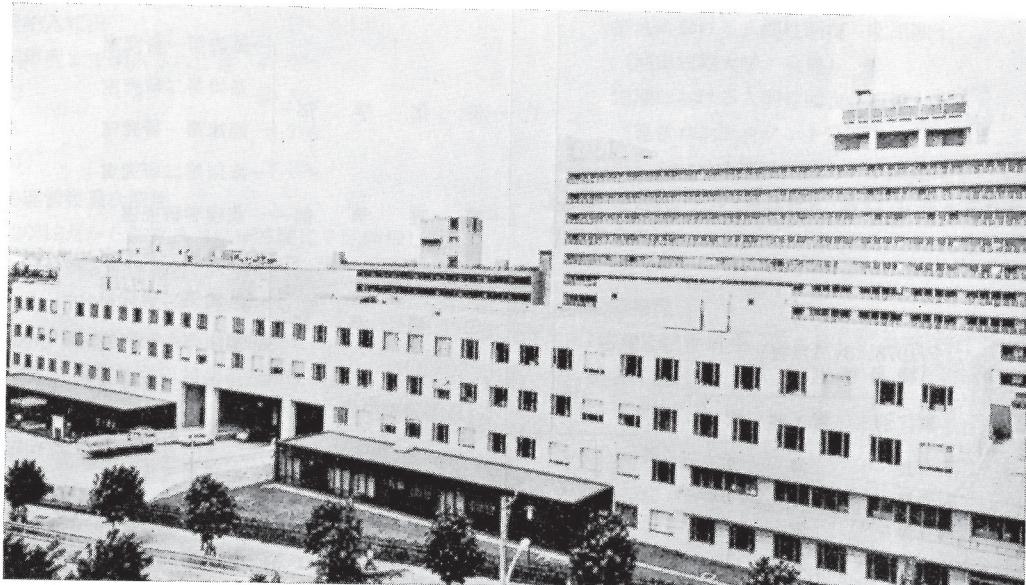
東京都老人総合研究所概要ならびに東京都老人総合研究年報 6 (1977年度) より

1. 設置目的

従来、わが国の老人対策は著しく立ち遅れているといわれているが、その推進を図るため、当面している諸問題を総合的な見地から科学的に究明検討することが必要

である。

このために、東京都老人総合研究所は、東京都養育院付属病院の機能と密接な連けいをもち、老人病と老化に関して医学的見地から研究するのみならず、老人心理学、老人社会学、老人リハビリテーションなどの老人問題を総合的に研究し、東京都の老人福祉対策を推進するための科学的背景となる研究機関として昭和47年5月に設置されたものである。



東京都老人総合研究所全景（背景は東京都養育院ならびに東京都養育院附属病院）

2. 組織機構

(1978. 3. 1現在)
職員種別

種別	常・非	數
所長	常	1
副所長	非	1
部長	常	7
	兼	1
	事扱	2
室長	常	20
	非	1
国内顧問	研究員	7
国外〃	〃	2
流動研究員	〃	14
研究員	常	44
	非	17
	兼	66
研究助手	手員	94
作業	常	9
次	常	1
課事	常	1
運用	常	1
計	{常 非 兼	194 42 66 計 302

